

# 2014年度 博士学位論文審査報告書

No. 1

提出期限：口頭審査 2015年 2月 7日(土) 後3日以内厳守




日本語文化専攻	氏名 藤山 益美	学生 番号	B14001
論文題目	『雨月物語』考 —「浅茅が宿」「吉備津の釜」「蛇性の姪」を中心として—		
審査概要及び評価（2000字） <u>主査が記入</u> （ワープロで清書してください。）			
<p>本論考は『雨月物語』の全9篇のうちから、「浅茅が宿」、「吉備津の釜」、「蛇性の姪」の3篇をとりあげて考察の対象としたものである。この3篇を中心とした理由は、論者の関心がかつばら男女の対幻想のあり方、および女性の自己実現の問題にあり、本論考はそうした観点から『雨月物語』を再考しようとする試みであるからにほかならない。</p> <p>その限りでは従来の『雨月物語』研究とは幾分アプローチの方法を異にするものである。したがって、参考とされた先行研究の文献も、秋成研究以外のジェンダー論等がしばしば引用されている。このことは、良く言えばユニークな視点という評価になるだろうが、その一方では恣意的ということにもなりかねない危うさを伴っている。論者自身もそのことは自覚しており、先行の秋成研究の成果への目配りも一応は十分になされている。</p> <p>第1章では「浅茅が宿」をとりあげ、第1節では「待つ女」宮木の恨みの心情を解析することに主眼を置いた。また、第2節では、もう一方の勝四郎を、トポスとしての異界との関連において論じている。宮木については、とりわけ、その姿の変容に着目し、原典の白話小説『愛卿伝』の愛卿、あるいは『伽婢子』の宮木野と比較しつつ、「他者からの承認」に宮木のアイデンティティの拠り所を求めた点は、やや注目に値すると言ってよいであろう。また、帰郷する勝四郎を「異邦者」と捉えているが、このことも論点としては、それなりの有効性を持っていそうである。</p> <p>続く第2章では「吉備津の釜」を考察している。第1節では、まず伝統的な規範意識と女性の問題をとりあげ、磯良の置かれた規範性と、霊になることでの解放を考察した。この部分がもっともジェンダー論に傾斜しているのだが、女性の置かれた状況といった一般化を免れず、作品に表現された磯良の問題として論じきれなかったのは残念である。第2節では、磯良の怨みと変身に着目し、妬婦譚としての構造との関係の中で論じていった。そして、磯良は「(家の中では)存在理由のない女性」であったが、吉備津神社の神官の娘といった聖性と、その名に秘められた醜さが一気に開放された時に鬼に変貌したと結論づけた。また、秋成が「もののけ」といった異形の怨霊を描くことの背後には、本質的には人以上に正直な存在である「もの」に対する共感性があったと結論付けている。</p> <p>最後の第3章では「蛇性の姪」を考察しているが、前の2つの章とは幾分方法上の違いが見られる。第1節では、記紀をはじめとして、『今昔物語』等の文献から</p>			

三輪山伝承を考察しているが、ここではそれが原拠であることの確認にとどまっておき、「蛇性の姪」がそこからどのように換骨奪胎されていったかの経緯の分析は不十分である。第2節では、道成寺伝承を原拠としてとりあげている。ここでは、蛇性に変身することで女性が自己解放を果たしたと解釈し、また一方では蛇性であることゆえに、より純粹に女性としての本質を体現していると考察している。ここでも、やや図式的に解釈しすぎていることは否めない。

さて、本論考を全体として評価するならば、従来の『雨月物語』の読みとは違った観点からの解釈を提示しようとした点は評価に値する。ただし、やや現代的に過ぎる解釈であり、時間軸の中における客観性には問題を残すものとなった。そして、時として現代に引き付け過ぎる解釈は、それぞれの作品の中における女性像の持つ固有性、及び秋成文学としての特質を見失うことにもなりかねない。

また、『雨月物語』研究以外の文献への論究の多いのも本論考の特徴である。赤坂憲雄、小松和彦等の民俗学の成果が取り入れられることは珍しくないが、ここでは特にジェンダー論の視点から、上野千鶴子、若桑みどりなどが引用されている。そうしたジェンダー論の視点は、本論考において重要な位置を占めており、論にユニークさを与えていることは間違いないが、この点での評価は分かれそうである。また、第1章と第2章での現代的ともいえる解釈に比して、第3章では原典研究的な色合いが濃く、他の2章との関係においてはややバランスを欠くことも否めない。

以上、藤山論文は多分に荒削りなところも見うけられ、これまでに述べてきたように欠点もまた随所に指摘できなくはない。その一方では、自らの観点到立って意欲的に研究に取り組み、一応は論者なりの解釈を示しえた論考として評価することができる。今後さらに研究を進めていく端緒に立つ研究成果として、本論考「『雨月物語』考―「浅茅が宿」「吉備津の釜」「蛇性の姪」を中心として―」は、博士(文学)の学位に値するものと判断される。

口述 審査	合格		
主査	金田文雄 教授 		
副査	佐藤茂樹 教授 	副査 柚木靖史 教授 	副査 森田雅也 教授 